

2020年9月27日

世界宗教として仏教を再興したダルマパーラ

宮原 豊 (9組)

【日本を救ったスリランカのジャヤワルダナ大統領】

敗戦後の「東京裁判」でインド人パール判事がただ一人「日本無罪論」を展開し、日本を弁護したことは比較的よく知られているのに対して、1952年に日本が国際社会に復帰する前年にサンフランシスコ講和会議の場で「日本を救った」と言われる演説をしたセイロン（今のスリランカ）代表のジュニウス・リチャード・ジャヤワルダナ（当時大蔵大臣）の名前を知っている人は少ないです。

（写真：若き日（22歳）のジャヤワルダナとサンフランシスコ講和会議での演説）



講和会議は敗戦国・日本の独立を認めるかどうかを決する正念場でしたが、米国を中心とする講和条約案に対し、ソ連は日本独立を制限する対案を提出し、中華人民共和国（共産党政権）の出席を求めるなど講和会議は紛糾していました。そのような中を、ジャヤワルダナは「日本は自由であるべき、占領を解いて直ちに独立を回復させるべき」とし、「憎悪は憎悪によって消え去るものではなく、ただ慈愛によってのみ消え去るのである」と仏陀の言葉を引用しつつ、アジアにおける日本の尊厳ある立場を述べた上で、日本に対する賠償請求権を放棄することを言明しました。その時会場はしばらく静まり返った後に大喝采が続き、結果として数ヶ国を除き49か国が講和条約に署名し、日本はついに国際社会に復帰したのです。ソ連の思惑は日本の分割統治であったと言われていました。

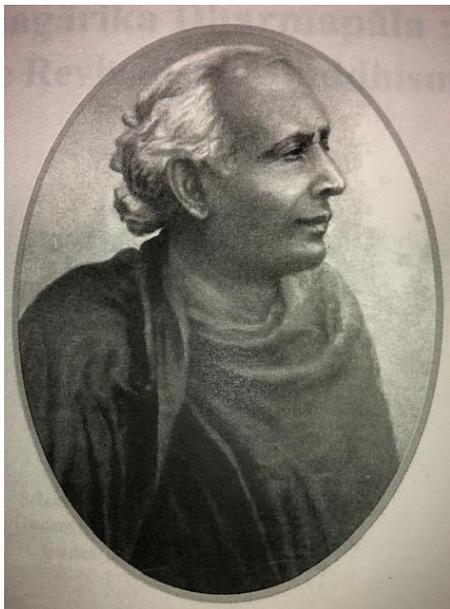
後に第2代スリランカ大統領となるジャヤワルダナは、同じスリランカ人のダルマパーラが日本の仏教界・仏教徒と深い絆で結ばれていたことをよく承知しており、またジャヤワルダナ自身の経験からも日本や日本人が一方的に裁かれるべき罪人であるはずはないと認識していたことによります。日本人であるならばジャヤワルダナに対する感謝の念を忘れることが出来ません。日本は明治中後期から、仏教文化を底流としてインド、スリランカ、他のアジアの人々と相互理解を深めてきましたが、この仏教と仏教芸術の交流がインド・サールナートに野生司香雪画が描いた「釈尊一代記」の壁画として実を結んでいるのです。

【仏教再興に尽くしたダルマパーラとは】

去る 9 月上旬、香川県ミュージアムで開催された「野生司香雪とサールナートの仏伝壁画展」についてのレポートを 65 期 H P にアップしてもらいました (9 月 11 日)。サールナートの初転法輪寺 (ムーラガンダ・クティー・ビハラ) は、インドの仏跡再建と世界宗教としての仏教再興に尽力したダルマパーラによって設立され、ダルマパーラは本堂に「釈尊一代記」壁画を描いてもらうために日本人画家を招聘しました。

1903 年 (明治 36 年) に発足した日印協会で、大隈重信、渋沢栄一という幹部や財界人等 139 名の会員名簿の中にダルマパーラ (カルカッタ) の名もあります。この 14 年前の 1889 年 (明治 22 年) にダルマパーラは初来日しましたが、後に日印協会の役員となる高楠順次郎博士 (仏教とインド学の研究家) と知遇を得るなど、多くの日本の仏教関係者と交流を深めました。ここではダルマパーラとはどのような人物で、日本との関係はどのようなものだったのかを紹介します。(下の写真)

ダルマパーラは 1864 年に生まれましたが、ダルマパーラの生まれたセイロンはインドと同じように大英帝国の支配下にありました。セイロンのシンハリ族の人々は伝統的な仏教を蔑ろにし、母語シンハリ語を話すことを嫌い、子供たちをミッション・スクールに通わせました。ダルマパーラの両親も長男に Don David と名付け、5 歳の時にミッション・スクールに入学させました。Don David は利発で勉学に励む優秀な生徒でしたが、そんな時にキリスト教徒と仏教徒との衝突があったのを境に彼はミッション・スクールに通うことを止め、パーリー語と仏教を学び始めました。そして仏教以外には普遍的福祉を実現することはできないと確信し、反キリスト教・反大英帝国の聖戦を始めました。父親のこだわりに従い、1884 年に一旦は植民地政府の教育省に勤務しましたが、直ぐに職を辞し、名前をアナガーリカ・ダルマパーラ (Anagarika Dharmapala) に変えました。



アナガーリカ・ダルマパーラの名前の秘密について説明します。An と Agarika ですが、An は「否定」、Agarika は家持ち (家長、世帯主) を意味するので、「家がない人」です。同様に、Dharmapala は Dharma と Pala の二つの語からなり、Dharma (真実) はゴウタマ・ブツダの教えのこと、Pala は保護者、救済者の意味なので、アナガーリカ・ダルマパーラは「家を棄て仏陀の教えを守る人」を意味します。

ダルマパーラはオルコット協会で神智学に惹かれ、1883 年にはマドラス (インド・タミールナド州チェンナイ) を旅行、1889 年に日本を訪問しました。神智学協会はキリスト教に圧迫されるスリランカ仏教の復興を支援して大きな成果を上あげており、会長 H.S.オルコット大佐 (米国人) の名声は日本にまで届き、キリスト教徒の攻勢に危機感を抱く日本仏教界がオルコット会長を日本に招聘、ダルマパーラも随員として初来日しました。パーリー語で「三帰依五戒」を唱える白人仏教徒に京都・知恩院の満場の観衆は度肝を抜かれたようですが、神智学協会の演説会は全国 33 都市で合計 76 回開催されました。

この時、ダルマパーラは日本の寒さのために体調を崩し長く病床に伏しましたが、若き日本人仏教徒・高楠順次郎が熱心に看病し、二人は終生変わらぬ友となりました。ダルマパー

ラは日本に滞在し、多くの日本人と交友を結ぶ。高楠順次郎は、ダルマパーラが日本に来たことを知り、彼を歓迎し、彼が日本に滞在する間に、高楠は彼を看病し、二人は終生変わらぬ友となりました。ダルマパーラは、高楠の看病のおかげで、日本に滞在し、多くの日本人と交友を結ぶ。高楠は、ダルマパーラが日本に来たことを知り、彼を歓迎し、彼が日本に滞在する間に、高楠は彼を看病し、二人は終生変わらぬ友となりました。

ラ 25 歳、高楠 23 歳の時です。翌年 1890 年にマドラスで開催された神智学会に参加したダルマパーラは、インドで仏教復興の仕事をスタートさせました。その後のダルマパーラの活動は実に精力的なものです。

1891 年 1 月 20 日に、2 人の日本人（釈興然と徳沢智恵蔵）とともにバラナシを経てインド巡礼の最初の訪問地サールナート（鹿野苑：仏陀が初めて説教した場所）に到着。サールナートは荒れ果て、ダメーク・ストーパも破損が進んでいました。22 日に、仏陀が悟りを開いた地ブツダガヤの荒廃を見て涙し、ブツダガヤ復興を胸に秘めてスリランカに戻ります。同年 5 月にインドにおける仏跡再建と仏教復興を期して大菩提会（マハ・ボディ・ソサイエティ）を設立、同年 8 月、大菩提会の名目でカルカッタに（小さな）土地を取得し、大菩提会の本部を設置しました。

右の写真：ダメーク・ストーパ
（仏舎利塔）

【日本人画家に壁画揮毫を要請】

ダルマパーラの二度目の訪日は 1893 年、シカゴで開催された世界宗教会議の帰路、ハワイを訪問後でした。仏教界を代表して参加した世界宗教会議におけるダルマパーラの講演は大成功を収め、ハワイでも大歓迎を受け、日本ではダルマパーラ持参のブツダガヤの石



仏が東京芝の天徳寺で展示され衆目を集めました。三度目は 1902 年ですが、この時に日印協会設立に尽力し、これが前述のダルマパーラが日印協会会員になった理由です。そして四度目の訪日は 1913 年（大正 2 年）ですが、二回目、三回目の訪日時に比べるとその時ダルマパーラは冷遇されたと言われています。それでも、ダルマパーラは日本各地で、欧米の排日の風潮を批判し、日本称賛の姿勢を示し続けたと言われます。

ダルマパーラは 1906 年に、後に初転法輪寺を建設することになる土地を購入します。その後、1914 年に英国植民地政府の圧力により、ダルマパーラはカルカッタに 5 年間監禁されました。1920 年にインド遺跡発掘調査団が設立され、各地（アンドラ・プラデシュのナガルジュナ・コンダや西パキスタンのタキシール等）で仏教遺跡が発掘されましたが、ダルマパーラは遺跡の保存をインド政府に願い出ます。大菩提会が遺跡と発掘した遺物を保管するために適切な僧院を建設することを条件に許可されます。ようやく 1926 年に 10 年以内の建設を目指して工事を開始され、1931 年（昭和 6 年）に初転法輪寺が完成。インド政府遺跡発掘総責任者はブツダの聖なる遺物を大菩提会に寄贈。落成式典には世界の仏教国から 5 万人以上の人々が集まり、後にインド共和国初代首相となるジャワハール・ラル・ネルー夫妻も参列しました。

そこで、ダルマパーラは日印協会（カルカッタ日本商品館）を通し日本政府に「釈尊一代記」の壁画揮毫のために日本人画家の派遣を要請します。インドで衰退していた仏教と仏教芸術が日本には存在することをダルマパーラはよく理解していたことによります。

【野生司香雪とダルマパーラ】

要請を受けた文部省は高楠博士等と協議した結果、渡印経験もあり仏教美術に通じ、また日印協会とも縁の深い桐谷洗鱗画伯が選ばれました。ところが桐谷は渡印前の 1932 年に急逝してしまいます。そこで、東京美術学校ならびにインド・アジャンタの石窟壁画の模写などで桐谷と縁のあった野生司香雪が後任として選ばれてインドに赴くこととなりました。

香雪は 1932 年 11 月カルカッタに到着しました。カルカッタで香雪は詩聖ラビンドラナート・タゴールを訪問、またアジャンタ石窟模写の仲間であった旧知のムクル・デー（当時カルカッタ官立美術学校校長）にも協力要請、12 月にサールナート入りしました。

1933 年 1 月に、仏僧になる得度式のために初転法輪寺を訪れたダルマパーラは、香雪揮毫の「降魔成道」の図を見て、これがアジャンタ洞窟の壁画に匹敵する規模で、また描かれた絵の素晴らしさを称賛したと言います。4 か月後、ダルマパーラは 69 歳で逝去しましたが、後年になって香雪はダルマパーラにせめて「降魔成道」だけでも見てもらえてよかったと述懐しています。



【世界宗教としての仏教】

ダルマパーラの活動を支えた仏僧の一人は、インド共和国初代法務大臣ビームラーオ・アンベードカル博士（*注）に「仏陀の教え（ダンマ）」を説いた方です。アンベードカル博士は 1956 年 65 歳の時に、波乱に満ちた生涯の幕を閉じますが、その数カ月前に仏教に改宗します。その時博士とともに数十万人の人々が仏教徒になりましたが、アンベードカル博士に従って改宗した人々のことを新仏教徒と言います。このようにダルマパーラは現代インドの仏教界に大きな足跡を残していますが、そのインド仏教界は今、日本人僧・佐々井秀嶺師により導かれております。ヒンズー教と仏教はともにバラモン教を祖としており、ヒンズー教は「仏陀はビシュヌ神の 8 人目のアバター（化身）である」と言い、仏教を理論的に取り込んでしまっているかのようですが、むしろ仏教の普遍性はインドを越えてアジアや欧米にも広く認知されています。昨今、インドは世界の中で存在感を増し、インド人は世界各国の様々な分野で活躍しています。まさに「最後の大国」として羽ばたこうとしておりますが、2500 年前にインドで興った仏教は世界宗教として、これから世界で活躍するインド人にとってその活躍の場が大きくなればなるほど大きな意味を持つのではないかと考えられます。

（*注）「現代インドの巨人：アンベードカル博士」（2018 年 6 月 8 日にアップした H P 拙稿 http://ueda65ki.sakura.ne.jp/NEWS/Miyahara_Essai1806.pdf を参照ください）